

東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵と文・柳たかを

褒めてのぼす（豚もおだてりや木に登る）

下の兄が2歳の時の話、名前は（芳道・ヨシミチ）、家族は「ヨッさん」と呼んでいた。

昭和18年（1943年）、時代は戦時中、父は終戦までの約2

にもいない。

「どこに行った!？」、押し入れの布団のすき間にでも隠れて遊んでいるかと「ヨシミチやーい」とのぞき込んでも返事はない。

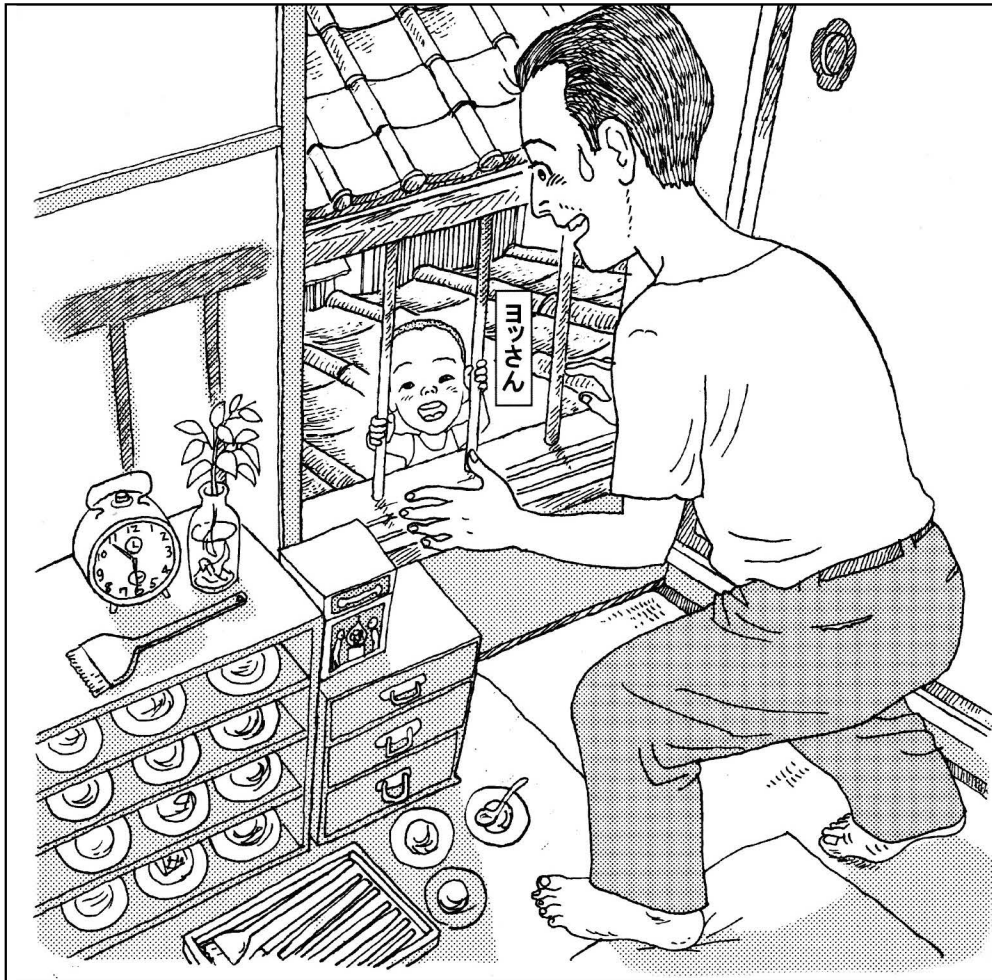
とその時、後ろから「オートタン」呼ぶ声がある。

ヒョイとふりかえると、窓のそと、屋根瓦の上に仁王立ちし、傾斜した瓦屋根を滑り落ちるのをたえるように両手で窓枠の縦棒を握りしめている息子の得意満面の笑顔とはちあわせした。

「アブナイ!」

喉まで出かかった叫び声を飲み込み、とっさの機転で父は満面の笑顔で「ホーホー すごいなあ ヨッさんすごいなあー」と、小さな頭が通り抜けられる窓枠縦棒の間隔を呪いながらも、ヨッさんが何かの拍子に縦棒を握った手を離さないことだけを祈りながらゆっくり近づいていった。

子どもはほめられるとぐんぐん元気になる。幼くても叱られてるのか、ほめられてるのかよく知っている。イタズラをした時、いきなり叱ると、子どもは叱られた恐怖心と驚きに思考停止のパニックを起こし、その結



※ 窓枠縦棒の隙間から瓦屋根の上に出て得意満面のヨッさん、脅かさないように近づく父

年間、徴兵され神戸の高射砲部隊の二等兵として苦渋の従軍生活をしたが、その直前の話。

ヨッさんは好奇心旺盛な子どもで目を離すと絵の具や膠・ニカフ（日本画絵具のメディウム）の入った皿に手を突っ込んだり、その手を口に入れたり一瞬も目をはなせないイタズラ坊主。

初夏の季節、二階の画室の窓を開け放し仕事をする父の横でヨッさんがいつものようにゴソゴソ一人遊び。

父が汚れた筆のたばを洗いに階下に降り、ついでにトイレに寄って戻って来ると、アレレ？ヨッさんがいない。

仕事場の四畳半、隣室の三畳間、その向こうの物干し場、どこ

果叱った大人を後悔させる。

逆に大人が、その子のユニークな個性のなせるワザと、あえてマイナス面に目をつぶり褒めてやると、子どもは達成感や充実感を強く感じ前向きな気持ちに満たされ元気になる、褒めてのぼす。

得意満面の笑顔のヨッさん!

「パツ!」電光石火、窓枠の縦棒をつかむ小さな両手をつかめたその瞬間、父は兵隊にとられる自分のことなど忘れて心の中で神さまに感謝の言葉をつぐやいたにちがいない。

やぶにらみ日記 (515)
東成区の沼利



(57) 写生



やぶにらみ日記 (516)
東成区の沼利



(58) 写生



やぶにらみ日記 (517)
東成区の昭和



(59) 写生



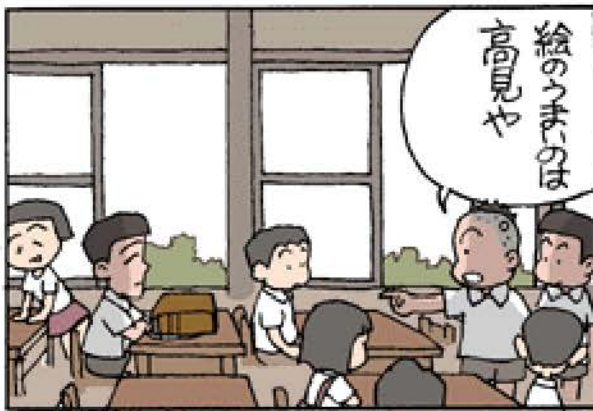
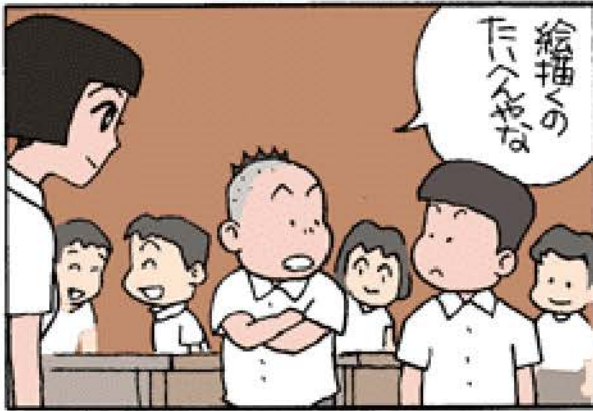
やぶにらみ日記 (518)
東成区の昭和



(60) 写生



(61) 写生



(62) 写生



やぶにらみ日記 (521)
東成区の昭和



(63) 写生



やぶにらみ日記 (522)
東成区の昭和



(64) 写生



やぶにらみ日記 (523)
東成区の昭和



(65) 写生



やぶにらみ日記 (524)
東成区の昭和



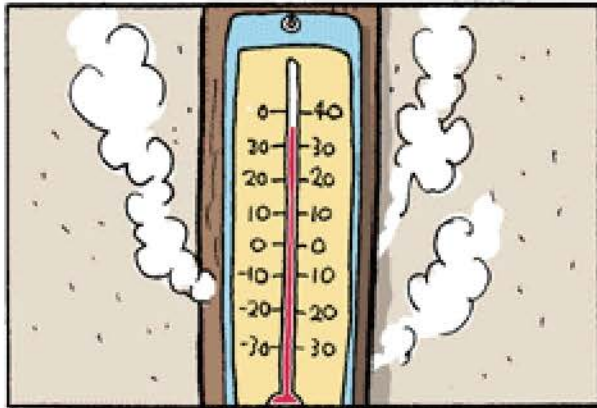
(66) 写生



やぶにらみ日記 (525)
東成区の昭和



(67) 写生



やぶにらみ日記 (526)
東成区の昭和



(68) 写生



